天才第二王子は引きこもりたい

【穀潰士】の無自覚無双

4

柊彼方
Hiiragi Kanata

illust.
ぺんぐぅ

CHARACTERS
―主な登場人物―
ニート
アストリア国の第二王子で、
自称【穀潰士】の
心優しい元引きこもり。
戦争を避ける道を探す。
アレク
アストリア国第一王子で、
ニートを溺愛している兄。
魔国侵攻を企むが、
その真の狙いは……
ロイ
ニートの親友。
堅物な剣士。
テト
魔国を治める魔王。
故国防衛に奔走する。
ステラ
ニートの親友。
男装の少女。
賢者
アレクの右腕として
戦場を駆ける。
三英傑の一人。
ルーグ
ニートの担任教師。
実は三英傑の一人だが、
魔国の側につく。
ルカ
テラロッサ国の第二王子。
ニートの暗殺を
謀ったが……
レグノス
魔国の宰相。
テトの右腕
として働く。
ファルロス
【管理人】の一人。
ニートの師匠でもある。

プロローグ

昔々、あるところに神様がいました。
神様は孤独で暇だったので何千もの星を作り、その星々に命を吹き込みました。
最初は吹き込んだ命が、自分の考えとは異なる動きをする様子を、とても楽しく見ていた神様。
しかし傍観だけしていた結果、最終的には文明が失われ、何億もの星が滅んでいきました。
神様は考えました。長く楽しむためにも管理する存在が必要だと。
しかし自分はその星を眺めているのが好きなだけ。管理するのは面倒なのです。
そこで神様は、自分の代わりに管理してくれる存在を用意しました。

◆◆◆◆◆◆

昔々、あるところに一人の人間がいました。
その男は魔族との戦争で家族を失い、焼け落ちた家の前でただ絶望して空を見上げていました。
なぜ神様は命なんて作ったのか。どうして戦争なんて起きるのか。
その時、何もかも失った彼の前に光が降り立ちました。

『もしこの世界を正しく導ける力を与えると言ったら、君は何を望む？』
その声は静かで、けれどこの世のものとは思えぬほど温かく響きました。
男は迷わず答えました。
「……誰も、俺と同じ悲しみを知らない世界を」
その言葉に神は微笑み、彼に〝人族の管理者〟の力を授けました。
それはこの世界の理に干渉し、命の流れすら操ることの出来る神に等しい権能。
人は知らぬうちに、彼の庇護のもとに守られ、導かれ、争いの火種を摘み取られていきました。
そしていつしか彼は影に生きる者として――「影の王」と呼ばれるようになりました。

◆◆◆◆◆◆

三千年の時が流れました。
人族の国々は繁栄し、五つの大国に分かれたことで小さな戦争はありつつも、表面上は平和が続いていました。
しかし影の王の胸の中には小さな疑念が芽生えていました。
――本当にこれでいいのか？
戦争は減りました。飢えも悲しみも少なくなりました。
しかし、魔族という戦争の火種になりかねない存在は、未だ世界の反対側に生きています。

そして彼は知っていました。魔族にもまた〝魔族の管理人〟という自分と同じ、神に選ばれた存在がいることを。
彼が人族の繁栄を願っているように、向こうの管理人も魔族の未来を考えているはずです。そして管理人の権能を悪用すれば、魔族を操作することなど容易いものです。
――真の平和とは管理人が一人になることではないのか？
そう考えたとき、彼の中で長い年月の間保たれていた均衡が崩れました。
現在、彼はアストリアという国で影の王として暗躍していたので、アストリアを人間の代表の国にすることに決めました。
しかし普通の人間では、世界の王になることは難しいかもしれません。
そこで影の王は転生の儀を行い、異世界から人間を呼ぶことにしました。
そうしてアストリアの第一王子であり、転生者であるアレクを、次の世界の王として君臨させることにしました。
人族を再び統一して魔族すらも討つ。そうすれば後は自分が世界の管理人となって平和を維持すればいいのです。
めでたしめでたし……とそれまでは思っていました。

◆◆◆◆◆◆

アストリア国王城。王の間にて。
アレクは、冷たい拳銃の銃口を影の王に向ける。拳銃はわずかに震えたが、引き金にかけた指先には少しの躊躇もない。
アレクの背後に立つ賢者の掌からは細い糸が伸び、影の王の身体を宙に縛り付けている。
魔術の鎖は肉を切らず、影の王の自由だけを奪っていた。
「なぜ、こんなことに……」
「さぁ？　なんででしょうね？」
神に選ばれた〝人族の管理人〟が、自らの選んだ〝王〟に殺されようとしていたのだ。
「私を殺せばお前の大切な弟はどうする？」
「神の御業でしたっけ？　別にそんなもの、最初から信じてませんよ？」
「は？」
影の王はアレクの言葉に絶句してしまう。
神の御業。それは影の王がアレクを唆すために用いた言葉。アレクに話を持ちかけた時、彼は弟のニートが死んだと知らされ憔悴しきっていた。
そこへ、転生の秘儀を扱える自分であれば死者すらも蘇生させることが出来ると告げて、その対価として、アレクには五大国の統一を提案した。
そしてアレクはその言葉を信じ、影の王の傀儡となって隣国のテラロッサ国を滅ぼしたはずだった。

「貴方からの信頼を勝ち取るために乗ってあげたまでです。すると見事に情報を色々と吐いてくれましたね。人族の管理人さん？」
「……っ!?」
テラロッサを滅ぼした時点で、影の王はアレクを信頼していた。このまま五大国を統一して、魔族すらも滅ぼしてこの世界の王になってくれると。
だからこそ影の王も、アレクからの信頼をさらに深めるために自身の情報を開示した。
自分が人族の管理人であり、ある程度の権能を持っていることも。
「僕は人の下につくことが嫌いなんですよ。それは相手が管理人だろうが関係ない。貴方の傀儡になる気は毛頭ないし、僕は僕が描く物語にしか興味がない」
「……私を殺すことで何のメリットがある？　私の権能を知っているだろう？」
管理人の権能。それは管理人だけに許された、人間では絶対に得られない神の力。
「えぇ、権能がどれだけ強力なのかも、もし管理人が死ねば、その能力が殺した相手に継承されることも知っています」
「……は？」
「なので僕は貴方を殺し、奪った権能でニートを生き返らせることにしました」
「な、何故そのことをお前が知っている!?」
アレクの言葉に初めて影の王が動揺を見せる。
そんな彼の問いにアレクは肩をすくめて笑った。

「貴方の部下が全部丁寧に教えてくれましたよ」
「部下……？」
「管理課とかいう連中ですよ。人間界の均衡を見張る、あなた直属の影の者たち。あれを賢者が一人残らず制圧しました」
「は？」
「賢者が彼らを洗脳して、貴方の権能の仕組みも、継承の条件も全部聞き出しました」
アレクは自分以外、誰も信じない。
影の王が管理人であり、人間より遥か格上の存在であると知った途端、彼はすぐに自分が上回る方法を考えた。彼の部下である管理課の存在を調べ上げ、賢者に協力してもらって制圧。
そのうえで、影の王の弱点になりうる情報を全て引き出した。
「そんな馬鹿な……」
「管理課はかなりの実力を持っていたので色々と利用させてもらいます。しかし権能を持たない影の王はこの世界に必要ない」
アレクは銃口を影の王の額に押し当てる。
「あなたはもう、必要ないんです」
影の王は息を詰まらせた。金属特有の冷たさが額に食い込む。
「待て！　私を生かせばお前をもう一人の管理人に――」
「では、さようなら」

アレクは躊躇うことなく引き金を引いた。
かつてニートによって作られた術式が起動し、途轍もない速度で発射された弾丸は影の王の額を易々と貫いた。
影の王の瞳は一瞬だけ大きく見開かれ、それからゆっくりと閉じられた。
王の間に静寂が訪れる。
賢者の紡ぐ細い糸が空中でふっと消えた。張られていた支配の網は切れ、影の王の身体は跪くように崩れ落ちる。
アレクはただ床に転がる男を見下ろしていた。
「……なるほど。これが管理人の権能か」
そして管理人を殺したことによって継承された権能に、アレクはそんな感想を漏らす。
自分を襲う全能感と虚無感。記憶や技術がなくとも、権能の扱い方を脳が勝手に理解する。
「早速、ニートを蘇生させよう」
「……権能も試さずに、そんなにすぐに始めて大丈夫？」
「あぁ、問題ないはずだ」
アレクは瞼を閉じて、静かに詠唱を始める。
行うのは転生の儀の応用。一度死んだ魂をこの世界に引き戻す権能。彼の掌に浮かぶ光は、まるで星々の欠片をすくい上げたかのように淡く瞬いていた。
詠唱を終えたアレクは、再び目を見開いて権能を行使した。

「権能【蘇生（リバイブ）】」
呟いた瞬間、王の間全体が脈打つように光を放つ。
アレクを中心に何百もの魔法陣が展開し、神の理（ことわり）が世界を再構築する音が響いた。
死という概念そのものを拒絶するように空気が震え、死者の魂を呼び戻すための術式が編（あ）まれていく。
賢者は息を呑んだ。この光景は人の為（な）せるものではない。命を再び繋ぐなど、魔術の頂点に立つ彼女ですら理解出来ない領域だ。
しかし、次にアレクから発せられた言葉は予期せぬものだった。
「おかしい……理論上は合ってるはずなのに……何かが足りない」
「足りないって……何が？」
アレクは拳（こぶし）を握りしめ、うめくように答えた。
「魂が見つからない。ニートの魂が冥界（めいかい）のどこにもないんだ……！」
蘇生の術式は完成しても、本人の魂がなければ意味がない。本来死ねば魂は冥界に帰るはずなのだが、そこにニートの魂は見つからなかった。
視線を落として黙り込んでしまったアレクを気にかけるように、賢者は口にする。
「ま、まだ方法はあるんじゃない？　他の場所を探してみるとか……」
「……他の場所？」
賢者の言葉に眉を動かすアレク。すると彼は、ぶつぶつと独り言をつぶやき始める。

それも束の間。
「……見つけた」
「え？」
アレクの表情から不気味なほどに笑みが漏れる。
「生きてる！　ニートはまだこの世界で生きてたんだ！」
それはなくした宝物を見つけた子供のような笑顔だった。
アレクは背後の、誰もいないはずの空間に向かって口にする。
「管理課ナンバー４と５はいるかい？」
「「はっ！」」
すると突如として現れたのは、影の王と同様に漆黒（しっこく）のフードを被った二人。管理課のナンバー４のエルドラドと、ナンバー５のアスモデウスだった。
既に賢者の魔術で洗脳済みであったが、今となっては管理人の力をアレクが継承したため、洗脳なしでも彼らはアレクを新しい管理人として敬い、指示に従うだろう。
「命令だ。今すぐに魔大陸に行って魔王を殺してきてくれ」
「「承知いたしました」」
アレクの命令により、再び姿を消した二人。
そんな様子を傍（はた）から見ていた賢者は驚きを隠せなかった。
「ど、どういうこと？　ニート様が生きてるって？」

「権能で分かるんだ。ニートは今も魔大陸で生きてる」

何故ニートがそんな場所にいるのかは分からない。今ニートがどのような状況なのかも分からない。

けれどニートが生きているというだけで、アレクにとっては十分だった。

アレクは口角を吊り上げて不敵な笑みを浮かべた。

「待っててねニート。すぐに僕が魔族どもから救い出してみせるから」

一章　帰還

「ん……」
瞼（まぶた）を開けると、そこには未だに見慣れない天井が広がっていた。
窓から差し込む光で、おぼろげな意識がゆっくりと覚醒していく。
「もう朝か……」
ニート・ファン・アヴァドーラ――俺は、ゆっくりとベッドから体を起こす。
そして窓から王都の景色を眺める。本来なら、引きこもり時代に十年以上も眺めて見飽きたアストリア国の景色が見えただろう。
しかし今見えるのは、見慣れない魔国の王都の景色。
相棒であるテトが魔王の座に戻ってから、一か月と少しが経った。現在、俺は魔大陸でテトの手伝いをしている。
俺の学院の担任でもあるルーグ先生は、魔王軍総大将となり、軍関連の整備や訓練などの指示を。
イスカル国軍の総大将だったホーキスは、現在は魔王軍情報庁の長官として、魔大陸だけではなく、五大国の大陸の情報まで集めようとしてくれている。
それもこれも全て人族と魔族との戦争を起こさないためだ。

そのきっかけは、つい一か月ほど前に発生した、人族の管理課によるテトの暗殺未遂事件だ。
この世界の管理を神から託された存在、それが『管理人』と呼ばれる者たちだ。人族の大陸に一人、魔大陸に一人おり、彼らは世界が破滅に向かわぬように監視し、時に歴史に干渉する。
管理人の配下が『管理課』という集団であり、テトを襲った者たちもその一員である。
テトは殺されはしなかったものの、人族の管理人に敵対意思があるのは明白だ。
いつ敵が人族を扇動（せんどう）して侵攻してくるか分からない状況の中、俺やルーグ先生は相談して、いま人間界に帰るよりは、魔大陸を守るために動いた方が良いという結論になったのだ。
それに俺にも、魔大陸を守りたいと思う理由が出来てしまった。
寝室を出て魔王城の中を歩いていると、すれ違う魔族たちがいつものように声をかけてくれる。
「おはようございます、ニート様！」
「おはようさん、ニート」
「ニートさん！　今日こそ自分と戦ってくれませんか！」
魔王城のメイドさんであったり、魔王軍の四天王であったり、宰相（さいしょう）レグノスの息子のリュカであったり。
普通なら絶対に関わることのなかった魔族の人たちと俺は、仲良く交流することが出来ている。
しかも今は、俺が人族であると明かしたうえでだ。
こうして種族の隔（へだ）たりに関係なく手を取り合うことが出来ている中、人族との戦争を起こすわけにはいかない。

そのために俺は、ただのニートとしてではなく、アストリア国の第二王子として動かなければならない。

魔王城の王の間に着くと、そこにはテトと宰相のレグノス、そしてルーグ先生とホーキスがいた。

今日は重要な会議を行うため、朝早くから集まることになっていた。

ちなみに俺がアストリアの第二王子であることを、既にルーグ先生は知っていた。ホーキスから聞いたのか、それとも学院に入学する前に父上から聞いていたのかは分からない。

けれどそのおかげで、もう正体を隠す必要はなくなった。

「遅かったねぇ、ニート」

俺が最後に着いたためか、テトは少し自慢げに笑みを浮かべていた。

しかしすぐに彼の背後に立つ宰相が苦言を呈す。

「先ほどまで寝ていたテトを起こしたのは誰だっただろうか」

「うぐっ……」

どうやらテトも自慢出来る立場ではないようだ。

宰相がテトに敬語を使っていないのは、テトがやめさせたからだ。宰相とテトは魔王の座を巡って殴り合いもした間柄だ。そんな二人に敬語などもう必要ないとのことだった。

そして、ソラという名前だったテトだが、今後はテトと名乗っていくつもりらしい。

「じゃ、じゃあ早速だけど会議を始めよぉ」

テトは誤魔化すように話を変えた。

次に口を開いたのはホーキスだった。

「現在、アストリア国はイスカルとテラロッサを属国とし、連合軍を編成して魔大陸に侵攻するための準備を行っている」

何故ホーキスが魔大陸だけではなく、五大国側の情報も得られているのか。

その答えは彼が長を務めている魔王軍情報庁にあった。

情報庁とはその名の通り、情報を管轄している隠密の部隊。魔大陸の全ての情報を網羅しており、人間界にまで何百人もの魔族が潜伏して情報を集めている。

そう、俺は知らなかったが、どうやらアストリアにも魔族はいたらしい。そもそも人族は基本的に魔族の存在すら知らないため、魔族に比べかなり情報戦は出遅れていたようだ。

「アストリア連合軍が魔大陸に辿り着くためには二つの壁がある。一つ目が西国リブラード、二つ目が魔界と人間界の間に存在する大森林だ」

テーブルの上に敷かれた地図の西側が魔大陸。東側が人族の大陸となっている。

もしアストリアたちの軍勢が魔大陸に攻め入るのであれば、いまホーキスが挙げた二つの壁を越えなければならない。

「まずリブラードに関しては、アストリア連合軍の通過を許可するだろう。イスカルとアストリアとテラロッサの三国の軍に対して、一国では立ち向かうことすら出来ない」

リブラードは五大国の中でイスカルの次に規模が小さい国だ。国教があることで有名な国で、国

王より教皇のほうが地位が上という少し変わった国でもある。
「中央国のバルバトスはどうなんですか？」
中央国バルバトス。
五大国の中で最大の領土と人口を誇る大国。その名の通り大陸の真ん中にある。一言で表すなら自由の国だ。他の四大国と隣接しているためか、他国の影響をかなり受けている。
その国力は、アストリアとイスカル、テラロッサの三国と渡り合えるほどだ。
中央国なら止めてくれるのではないか。そう考えたのだが、ホーキスは首を横に振る。
「奴らが関与することはないだろう。自国のことならまだしも、魔大陸に三国が攻め入ろうとしているならバルバトスとしても都合がいい」
まとめると、アストリア率いる三国が今は魔大陸に向かっており、残りの二国は連合軍に対して干渉しないということだ。
先に五大国を統一してから魔大陸に攻め入るかと思っていたのだが、どうやら三国だけのようだ。
それほど戦力に自信があるのか、あるいは何か焦る要因があるのか。
「そして残った壁は残り一つ。未だに謎が多い大森林ことエルフの国だ」
大森林は子供の頃に読んでいた伝記などで出てきていた。
エルフという別の種族が住まう国で、部外者が入れば二度と出ることの出来ない迷いの森でもあると。
しかし伝記などに出てくる冒険者たちは、エルフという未知の存在に魅かれて大森林を冒険する

のだ。
「本当にエルフって存在するんですか？」
俺は気になって口にしてしまう。
長年引きこもっていたせいで無知で申し訳ないが、知らないものは知らないのでしょうがない。
空想上の存在だと思っていた魔族が実在するのだから、エルフも存在しそうだが、一応確認しておきたかった。
そんな俺の疑問に答えてくれたのは宰相だった。
「数千年も前からエルフ族とは魔族も交流をしている。と言っても、彼らは大森林からは出られないという国の掟があるため、彼らを見たことがある者は限られている」
エルフについて謎が多かった背景には、掟があったようだ。
確かにそれなら、誰もエルフを見たことがないのにも納得がいく。
「じゃあその大森林でアストリアの連合軍は足止めされるんじゃないのぉ？」
テトが発した疑問には俺も同意見だった。
単に森が深いだけでなく、人族にとっては未知であるエルフという支配者もいる。大森林を抜けることは不可能に思えたのだが、ルーグ先生が口を挟む。
「アストリアの三英傑の一人である賢者はエルフだ。大森林の問題に関しては彼女がどうにかする可能性が高い」
「え？」

俺とテトは思わず驚いた声を上げてしまった。
三英傑については、俺も当然だが知っている。
アストリアを守護する三つの〝剣〟である三英傑。
〝勇者〟と〝影の王〟と〝賢者〟だが、その三人の情報は謎に包まれている。
賢者は兄のアレクの指揮下にいると聞いたことがあるが、詳しいことは知らなかった。まさか女性でありエルフであるなんて、誰が想像出来ただろうか。
そして何故、第二王子でも知らないそんな情報をルーグ先生が知っているのか。
「なんでそんなにルーグ先生は詳しいんですか？」
「教師だからな」
ルーグ先生は何かと「教師だから」と答えることが多い。
色々なことを知っているのも、魔王軍の総大将になれるほど実力があるのも、教師だから。
俺も最初は本当に教師だからなのだと信じていたが、外の世界を知ってようやく、ルーグ先生の良い意味での異質さが分かった。
明らかにこの教師は強すぎる。
「そんな教師いますかね？」
試しに尋ねてみると、何故かホーキスと宰相が納得した様子を見せる。
「教師なら詳しいのも納得だな」
「流石(さすが)は教師だ」

「え？」
俺が間違っているのだろうか。
少し納得がいかないが、聡明な二人が言うのであれば別におかしいことでもないのかもしれない。
「そもそもどうして急にアストリアは僕たちを狙うことにしたんだろうねぇ」
ボソッと独り言のように疑問を漏らしたテト。
「別に急な話ではない。裏で人族の管理人が操っているのだろう」
「…………」
宰相の言葉にテトは黙り込んで視線を落とす。
管理人。それは今回の話において切っても切れない存在である。
魔族の管理人は俺の師匠でもあり、エドの主(あるじ)でもあるファルロス。テトが魔王の玉座を奪還するためにも協力してくれた、とても心強い味方だ。
そして人族の管理人についてなのだが……
「ボクの父上の仇(かたき)……」
テトは思い出したのか、表情を歪める。
先代の魔王は、急な病で亡くなったことになっている。しかし事実は異なっていた。
「断言は出来ない。しかしあの管理課と名乗る者たちの雰囲気には見覚えがあった」
人族の管理人の配下である管理課。
宰相が言うには、先代の魔王は彼らか、もしくは人族の管理人に殺されたとのことだった。殺さ

れた瞬間を見たわけではないので、残念ながら確証はない。
しかし、その真実を確かめる方法が一つだけあった。
それは転生者であり、師匠の配下の一人でもあるタロウが持つ権能、【攻略本(こうりゃくぼん)】の力を借りること。
その権能は魔族の管理人である師匠から得たもので、この世界の住人全ての情報が記録されている。しかもそれは過去に限らず、未来についての情報もだ。
だが、攻略本に書かれた未来を変えられる存在もいる。管理人本人や、管理人と関わった者だ。
まあ要するに、攻略本に載っている先代の魔王の情報を調べれば、答えが得られるのだ。
もしこの世界の住人に殺されているのであれば、その正体が。
そして別の上位の存在に殺されているのであれば、本来辿るはずだった未来が記されているのだ。
その結果は後者だった。
先代の魔王は、本当に急病で亡くなる運命にあった。けれど、それは実際の死から二十年後の話。
人族の管理人が運命を捻じ曲げ、先代魔王の死に関わったことが、これで確定してしまったのだ。
実行犯かどうかまでは分からないが。
すると、噂をすればなんとやら。王の間に新しく二人の魔族が現れた。
「おぉ、朝早くから全員揃ってるな」
「皆さん、お久しぶりです」
エドの主ファルロスと、その部下タロウが王の間へと現れた。

彼らは最近、テトがあることを任せていたため、魔王城に顔を出していなかったのだ。
その件について宰相が尋ねる。
「顔を出したということは情報は引き出せたのか？」
「全部引っこ抜いてやったよ。向こうの管理人が、情報が漏れないようにかなり厳重に術式を刻んでたから、かなり時間がかかったがな」
テトが任せていたのは、襲撃事件で現れた人族の管理課から情報を引き出すこと。
管理課のナンバー5のアスモデウスに関してはルーグ先生が真っ二つにしてしまったため、どうしようもなかった。
しかし師匠を足止めしていたナンバー4については師匠が無力化し、殺すことなく取り押さえていたのだ。
「ちなみに情報の抜き方については秘密だ。子供の二人に話すのはちょっと良くないからな」
師匠は俺とテトを見ながら言った。
そう言われたら余計に気になってしまうのだが、師匠は絶対に教えてくれないだろう。
「では、俺からその情報を皆さんに共有しますね」
それからタロウが、管理課から得られた情報を説明してくれた。
「まず、テトが一番気になっているであろう先代の魔王を殺した犯人は、前の人族の管理人でした」
「……っ」

テトはその事実に顔を歪める。
　本来の運命を辿れていれば、あと二十年もの時間が父親とテトとの間にはあった。その時間を人族の管理人が奪ったのだ。テトにとっては許せる話ではない。
　そんな中、タロウの言葉が気になったルーグ先生が尋ねる。
「『前の』とはどういうことだ？」
「つい一か月ほど前に人族の管理人は殺されていました。そして彼の力を継承した新たな管理人が生まれています」
「「「なっ……!?」」」
　俺たちは言葉を失ってしまった。
　管理人を殺せることも驚きだが、その力を継承して新たな管理人が生まれていることの方が重要である。
　そして一か月前と言えば、管理課の二人がテトを殺そうとしたタイミングと一致する。
「ちなみにテトの暗殺は、新たな管理人によって指示されていました」
　先代の人族の管理人の真意は分からないが、人族と魔族で戦争をしようとしていたのは間違いない。
　新たな人族の管理人は違う考えの持ち主という可能性もあったが、今のタロウの言葉でその可能性はゼロに等しくなった。再びテトを狙っているということは、魔族と敵対する意思があるということなのだから。

「それで新たな人族の管理人について、管理課の誰かがなったのか、それとも普通の人間がなったのか、正体は分かったのか？」
　宰相がタロウに尋ねると、彼は何故か視線を落とした。
　そして落とした視線を今度は俺に向ける。
「新たな人族の管理人は……アストリア国第一王子、アレク・ファン・アヴァドーラです」
「え？」
「アレクが賢者と協力し、人族の管理課を制圧。その後、管理人を殺害しています」
　俺の頭の中は真っ白になった。
　アレク兄さんが人族の管理人？　前の管理人を殺した？
　俺にとってアレク兄さんは優しくて賢くて、何もかもが完璧で誰にでも手を差し伸べるような聖人だ。人を殺したというのが信じがたかった。
「も、もしアレク兄さんが管理人になってるなら、この戦争も止められるんじゃ――！」
「やめる気ならとっくにやめてるはずだ。けれどこの一か月で状況はさらに悪化しているようにしか見えない」
　俺の微かな希望をホーキスが首を横に振って否定する。
「ニート。お前はあいつの表の部分しか知らないだろうが、俺は裏の顔も知っている。管理人を殺していても別に不思議じゃないほど、あいつは頭のねじが外れてる」
　ホーキスは過去にアレクと何かあったのだろう。どこか苦しげな表情をしながら口にしていた。

辺りを見渡すと、この中で驚いているのは俺だけだった。誰もがその事実を受け入れていた。

「おそらく今回の進軍の目的はニートの奪還でしょう。魔族がニートを人質に取っていると思われている可能性が高いです」

タロウは俺に視線を向けながら口にした。

確かにアレクのことだ。俺が魔大陸で生きていると知れば、助けようとしてくれるだろう。

もともと俺やルーグ先生は、アレクを含め、アストリアが人族の管理人に支配されていると見ていたため、魔大陸に残って迎え撃つ準備をしていた。

しかし、管理人がアレクになっているなら話は変わってくる。

「な、なら俺が人間界に帰ればいいだけですよね？」

アレクの目的が俺の救出であれば、俺がアストリアに帰れば解決する。

魔王城には五大国へ繋がる転移門が存在するため、今すぐに帰還することも可能なのだ。

しかし、ルーグ先生は別意見のようだった。

「そう簡単に上手くいけばいいが、まぁ難しいだろうな」

「え？」

「アレクとて、ニートを奪還するという名目で軍を率いているわけではない。ニートが見つかったからといって連合軍を、『はい解散』とすることも出来ないだろう」

アレク個人は俺の救出を考えているかもしれないが、軍としてはそうではない。

未開拓である魔大陸の探索と、魔国の支配といったところだろうか。

「でも、アレク兄さんは管理人になったんですよね？　その力で何とかならないですかね？」

「まぁなる可能性は確かにあるが……もう一つ懸念点がある」

「懸念点？」

「……いや、俺の考えすぎかもしれない。今の言葉は忘れてくれ」

俺が問い返すと、ルーグ先生は首を左右に振った。

彼の言葉が気になったが、今度はテトが口を開く。

「でもまぁ一旦ニートたちは帰ってみてもいいんじゃないかなぁ。別に今すぐにアストリアの軍勢が魔大陸に侵攻してくるわけじゃないし、安否報告ぐらいは行ってきてもいいと思うよぉ」

「そうだな。ニート殿やルーグ殿が不在でも安定するほどには魔国は復興してきた。一度その管理人と会ってみたらどうだろうか」

テトと宰相は同じ意見のようだった。

確かにここ一か月は玉座奪還の件で魔国内もバタバタしていたが、今はもう落ち着き始めている。

それに、未だに俺が亡くなったままだと信じている者も多い。特に家族やクラスメイトには一度、安否を伝えたいとは思っていた。

「まぁニートが帰るとしたら、俺とホーキスは護衛としてついていかないといけないな」

ルーグ先生とホーキスが一緒に帰ってくれるのであれば心強い。

二人とも人間であるため問題が起きることもないだろう。

「どうするかはニート次第だ」

ルーグ先生は真剣な眼差しで俺を見つめてくる。
俺の覚悟は既に決まっていた。
「帰ります。一度帰ってアレク兄さんと話がしたい」
この戦争を止めるための可能性が少しでもあるのであれば、動かない理由はない。
俺の決断に、話の成り行きを見守っていた師匠が頷く。
「ニートが決めたのならそうすればいい。俺が新しい人族の管理人に会いに行くより先に、ニートが会った方がいいだろうからな」
すぐに宰相が動き始める。
「分かった。であれば私たちは転移門の準備をしよう」
するとテトが思い出したように尋ねてきた。
「そういえばニートたちはどうやって魔大陸に帰ってくるのぉ？　転移門なんてほとんどないのに」
「それに関してはこれを使う」
俺は待ってましたと言わんばかりに一つの魔道具を取り出す。
「これは転移魔術の術式を刻んだ魔道具【ポータル】。この魔王城に座標を設定したからこれでどこにいようといつでも帰ってこれる」
俺もこの一か月、ただ手伝いをしていたわけじゃない。こんな未来も想定して、いくつもの魔道具を作り上げていた。ポータルもその一つだ。

魔大陸に帰りたくなっても、再びダンジョンの最下層まで降りなくて済む。
「ち、ちなみにこれは製作にどれくらいの時間がかかったの？」
「色々条件ありの簡易的な魔道具だからな。五時間とか？」
俺がそう答えると何故かテトは苦笑を浮かべ、宰相は珍しく目を丸くしていた。
「アハハ……流石はニートだねぇ」
「……テトを拾ってくれたのが君で本当に良かった」

◆◆◆◆◆◆◆

俺とホーキスとルーグ先生は軽く荷物をまとめて、魔王城の地下へと向かう。
太古の時代、人魔（じんま）戦争が起きていた時代の遺産である転移門。主に魔族が人族の国に乗り込む時に使ったものだ。基本的に全て破壊されたが、魔王城の地下に一つ保存されていた。
地下に向かいながらホーキスが真剣な口調で俺に尋ねてくる。
「ニート。お前に一つ尋ねたいことがある」
「なんです？」
「もし、お前がアレクを止めて、アストリアの王になったとしたらどんな国や世界を作る？」
「え？」
そんなホーキスの質問に俺は足を止めてしまった。

自分が王になるなんて一度も考えたことがなかった。兄のアレクがアストリアの王になるのが当たり前だと思っていたため、そんな考えにすら至らなかった。
「別に今すぐに答えてほしいわけじゃない。だが、そういった覚悟もしておいてほしいということだ」
「覚悟……」
「俺はイスカルの民だ。そこのルーグと違って、善意だけでお前を助けているわけじゃない」
そう言われて俺は思い出す。
ここ一か月仲間のように接していたが、ホーキスは元々イスカルの兵士なのだ。
アレクが捕虜として捕まえていたところを、ルーグ先生が勝手に連れ出したらしい。
「別に俺はイスカル国を独立させてほしいわけじゃない。あの土地と国風ではどうせすぐに滅ぶ。アストリアや他国の協力なしでは生きていけないのは事実だ」
イスカルはアストリアの北に位置する国で、三方を冷たい海に囲まれている。
唯一大陸と繋がっている南方には巨大なギルガルド山脈が聳え立つ雪国だ。民から魔力を徴収し、その徴収した魔力で軍需産業を発展させてきた軍事国家である。
そんな苦しい国だからか、少し前にアストリアに戦争を仕掛けてきた。その戦争でアストリアが勝利し、イスカルは属国になった。
俺もあの頃は校外学習で国境付近のルーベルクにいたため、戦争の渦中に身を置いた。
その時にホーキスとも戦ったというわけだ。

「しかし、今の状況は気に入らない。アレクはイスカルの民を兵力としか見ていない」
アストリアは、北国のイスカルと南国のテラロッサを属国にした。この戦争が終われば、二国ともアストリアの一地域となるだろう。
「俺にはイスカル人の矜持がある。当然イスカルを滅ぼしたくない。独立しなくとも復興はさせたい」
イスカル国の独立とまではいかなくとも、イスカルとしての名は残したいということだろう。最低でも属国、願わくは協力国ぐらいでいたいということだ。
「だからこそニート、お前に聞きたい。もしお前が王になるのであればどんな世界を作ろうとするのか。このイスカル元総大将である俺が尽力するほどの価値がお前にあるのか」
元総大将と聞こえた気がしたのだが、今はそんなことを気にしている余裕はない。
俺がどんな国を作るのか、どんな世界を作りたいと考えているのか。
アレクに戦争をやめさせて、アストリアの王を続けてもらって終わりだと思っていた。あとは家でごろごろするだけで引きこもれるものだと思っていた。
「俺は……」
「まぁそういう可能性があるってことだけ考えておけばいいさ」
俺が言葉に悩んでいるとルーグ先生が助け舟を出してくれ、再び歩き始める。それに続いてホーキスも止めていた足を動かし、重い靴音が再び階段に響く。
俺も慌てて二人の背を追いながら、胸の奥に残るもやのような違和感を振り払えずにいた。

やがて階段を降りきると、冷たい空気が頬を撫でた。
地下最深部。そこには、黒い石で造られた巨大な転移門が静かに佇んでいた。古代文字が刻まれた円環がゆっくりと脈動しており、微かに青白い光が漏れ出している。
「これが太古の転移門……」
俺が呟くと、先に来て準備を始めていた宰相が小さく頷いた。
「人魔戦争の時代に造られたものだ。王族とそれに次ぐ高位者しか使えなかったが封印は解除してある。行き先はアストリア王都郊外に設定しておいた」
ルーグ先生の視線が転移門の中心に注がれる。
「最初の目的はアストリア国王と王妃の救出。そして次にアレクと接触出来るように、俺が転移魔術で二人を運ぶ」
ルーグ先生曰く、父上と母上はアストリアの王城に幽閉されているとのことだった。
それもこれも全てアレクがアストリアで実権を握るため。にわかに信じがたい情報ではあるが、自分の目で確認する他ない。
転移門の前に立ち、宰相が静かに魔力を練り上げる。青白い光が一層強まり、門の輪郭がまるで呼吸するかのように脈打った。重力がわずかに歪み、空気の温度が下がる。
「行ってくれ。門が安定しているうちに通過するんだ」
宰相の声に合わせて、俺たちは転移門に足を踏み入れた。
足元の石床が淡く光り、身体がふっと浮かぶような感覚に包まれた。

視界が白く塗りつぶされ、音も匂いも消える。

◆◆◆◆◆◆

次の瞬間――風が吹き抜けた。
冷たく乾いた大地の匂い。空には薄い雲が流れ、遠くにアストリア王城の城壁が見える。
転移門の光はすでに消えており、俺たちはアストリア王都郊外の草原に立っていた。
「……魔力の流れが違う」
ルーグ先生が空気を撫でるようにして言う。
「本当だ……！」
試しに魔術で火をつけてみると、ボッと音を立てて指先に小さな火がともる。
身体の奥に溜まっていた魔力が一気に解き放たれる感覚があった。まるで長い間、水中に潜っていたあとにようやく息を吸えたような、そんな解放感。
「よし、問題なさそうだな」
ホーキスが腰の剣を軽く抜き、魔力を纏わせて確かめる。
刃の周囲に淡い青光が走り、風を切る音が微かに響いた。
「本当に帰ってこれたんだ……」
魔大陸に飛ばされて二か月。一度はもう帰れないのではないかと考えたこともあった。しかし、

この空気や温度は俺が十何年も生きた馴染み深いアストリアのものだった。
そんな実感に笑みを漏らしているとホーキスが俺の肩に手を置く。
「感傷に浸っているところ悪いが、さっさと王城に向かうぞ」
「は、はい！　じゃあ早速、王城に飛びますね」
俺は転移魔術の準備を始める。飛び先は王城の中庭。
ルーグ先生も俺の肩に手を置いた。
「創作魔術【転移】」
俺が詠唱を終えると同時に、青白い魔法陣が足元に展開された。空気がわずかに震え、光が全身を包み込む。次の瞬間、視界がぐにゃりと歪んだ。
――感覚が戻ったとき、俺たちはアストリア王城の中庭に立っていた。
陽光が差し込む中、白い石畳と噴水の水音が耳に心地よく響く。
「今のところ近くに兵士の気配はないな」
ホーキスは剣の柄に手をかけ、周囲の気配を探る。
そんな中、俺は独り言のように小さく呟く。
「やっと家に帰れた……」
胸の奥が熱くなる。
二か月前まで、当たり前のように暮らしていた場所。しかしここで安堵するわけにもいかない。
「正直、アストリアの兵士も今は信用出来ない。人目につかないように移動するぞ」

「王城の構造は把握しているな、ニート？」
「ええ。裏庭を抜ければ、地下牢へ通じる通路があります」
「国王が幽閉されているのは地下だ。そこを目指す」
三人で息を合わせるように頷き、影のように動き出す。
城壁を背に、俺たちは建物の裏側へと回り込んだ。

◆◆◆◆◆◆

裏庭はひっそりと静まり返っていた。
かつて花で溢れていた庭園は荒れ果て、雑草が生い茂っている。それでも中央の噴水だけはまだ水を流し続けている。
「ここを抜ければ地下へ繋がる階段があります」
俺は噴水の脇にある古い通路を指差す。
ホーキスが先頭に立ち、剣を抜いたまま慎重に進む。俺とルーグ先生がその背を追う。石造りの階段を降りていくにつれ、空気が冷たく湿っぽくなっていった。
階段を降りきった瞬間、鼻をつく鉄の臭いがした。冷たい空気が肌を刺すようで、壁に沿って並ぶ松明の光がゆらゆらと揺れている。
「……ここが地下牢のはずです」

俺が小声で言うと、ホーキスが前に出て手早く扉を蹴り開けた。
鈍い金属音が響き、重い鉄格子の列が現れる。
だが――
「……誰もいない？」
俺は思わず声を漏らした。牢の中はどこも空っぽだ。人の気配は一切ない。
「馬鹿な……いや、しかしここ以外に幽閉出来る場所などアストリアの王城にはないはず……」
ルーグ先生は困惑した様子で呟いている。
するとホーキスはふと口にした。
「そもそも見張りの兵士一人いない時点でおかしい。もしかしたら幽閉はされていないのかもしれんな」
「え？」
「とりあえず王の間に向かうぞ。そこで答えが分かるはずだ」
その後、俺は再び転移魔術を用いて、王の間へと直接移動することにした。

◆◆◆◆◆◆

視界に色が戻ると、そこにはいつもの見慣れた景色が広がっていた。王の間は特に荒れている様子もなく、異常も見当たらない。

「誰だ！」
聞き馴染みのある、安心出来るような声が響く。
その声の主は玉座から立ち上がり俺たちを見つめる。
「ただいま、父上」
俺は微笑みながら被っていたフードを脱ぐ。
父上こと、アストリア国王、グレイ・ファン・アヴァドーラは俺を見ると目を丸くして固まった。
父の隣には母も立っており、父同様に口元を手で押さえて固まっていた。
「……ニートなのか？」
父は震える声で、どうにか絞り出すように尋ねてくる。
「はい、帰るのが遅くなってしまってごめんなさい」
俺は目頭が熱くなるのを我慢して、笑みを浮かべる。
「グレイ王、ご安心を。彼は正真正銘（しょうしんしょうめい）、ニート第二王子です」
「ルーグ……！」
隣にいるルーグ先生も同様にフードを脱ぐ。やはり面識があったのか、ルーグ先生を見ると父は息を呑んだ。
「ニートおおおおぉぉ！」
「うわっ！」
父は涙を浮かべながら俺に向かって突進してきた。

そして俺を両腕で強く抱きしめる。
「良かった……生きてくれていて本当に良かった……」
父が泣いているところなど見たことがなかったため、どう反応していいか困ってしまう。
ルーグ先生とホーキスから聞いてはいたが、やはりアストリアでは俺は死んでいることになっていたらしい。
もちろん、テラロッサの第二王子のルカが俺を突き落としたことまではバレていない。あくまでダンジョンの事故で亡くなったということだけだ。
そのうえで、死んだのは学生のニートであり、穀潰しの第二王子のニートが死んだとは公表していないらしい。
「本当に良かったわぁ……ニートちゃんが生きててくれて……」
母も涙を頬に伝わせながら俺のもとまで近づいてくる。
「アーシャは無事ですか？」
「あぁ、今は学院にいるはずだ」
妹の無事を確認出来て、俺は胸を撫でおろす。
ルーグ先生とホーキスの前で恥ずかしいこともあり、どうにか俺は父の腕から逃れる。
それから少しして落ち着くと、父は俺たちに尋ねてくる。
「……どういうことか説明してもらえるな？」

それから俺は両親に、この二か月間のことについて説明した。
ダンジョンの事故で死にかけたこと。そこをテトに救われてダンジョンの最下層にある転移門から遠い西の魔大陸へ転移したこと。
それからテトの玉座奪還や、師匠などのエドの民との交流があったこと。
管理人という神に等しい存在がおり、アレクが前任者を殺して新たな管理人になったのを知ったこと。
そして俺たちは今、魔族との戦争を起こさないようにするためにアレクに会いに来たこと。
「そうか……」
話を聞き終えた父は視線を落として黙り込む。
おそらく、父も母も脳内で情報が溢れ返っていることだろう。
ルーグ先生とホーキスにこの話をした時も、理解してもらえるまでかなりの時間がかかった。突然管理人なんて存在がいると知って、受け入れられるわけがない。
「引きこもりだった息子がそんな大冒険をしているとはな……大変だったろう」
「よく頑張ったわねぇ、ニートちゃん。今度テトちゃんにも感謝を伝えないといけないわぁ」
理解出来なかったとしても、どうにか話をのみ込んで父と母は口を開く。
「次は私たちの番だな」
それから両親はこの二か月で起こったことを説明してくれた。
俺が消えてからアレクが戦争に反対する二人を幽閉し、アストリアの実権を握ったこと。

アストリアはイスカルの兵士と連合軍を組み、賢者の力も借りて南国テラロッサを支配下に置いたこと。
そして三国の連合軍は西国リブラードを目指して進軍していること。
しかし、なぜか突然、一か月前に両親が解放されたこと。
「今の私たちではアレクを止められないとの判断なのだろう」
一か月前と言えば、アレクが管理人になった時期と一致する。
管理人の権能を得たから、両親は障害にすらならなくなった。父と母はアレクの意向をそう受け取っているらしい。
「多分、違うと思う……アレク兄さんは父上と母上のことを思ってたんですよ」
気づけば俺はそんな言葉を口にしていた。
「管理人はもともとアレクを新たな王にするために動いていた。となれば二人や俺は管理人にとって邪魔な存在でしかない。抵抗して管理人に目をつけられないようにするために、二人を幽閉していたんだと思います」
俺はアレクの優しい部分しか知らない。
けれど誰よりも俺は、優しいアレクを知っている。
「新しい管理人になったことで、危機がなくなったから解放したんですよ」
アレクは自分が操られていることを逆手にとって、先代の管理人を殺したのだ。それほど聡明なアレクが、両親を危険視して幽閉するだろうか。

「そうか……そうだといいな」
父は少し微笑みながら頷いた。
そして俺は初めて二人に自分の目標を伝えた。
「だから父上、俺はこれからアレク兄さんに会いに行って、戦争を止めるようお願いします」
俺は王になりたいわけではない。ただ大好きな家で引きこもっていたい。
けれど、今ではそんな『家』と呼べる場所が、いくつも出来ていた。
俺にとって家とは自分の『輪』。自分が安心出来る空間。
このアストリアの王城はもちろんのこと、クラスメイトがいる教室、エド城、魔王城。引きこもっていた頃と違って、守りたいものがたくさん出来てしまった。
もともと家族だけが無事でいれば良くて、それでも満足出来なくてアストリアも守りたくなって。
最終的には人間だけでなく、魔族たちまで平和な世界でありたいと願っている。
自分が強欲なのは十分理解している。けれどどうしてもそんな世界にしたいと願ってしまった。
「アレク兄さんは今どこにいるんですか？」
「中央国バルバトスの西南の都市、ケプラスだろう。南国テラロッサから西国リブラードに向かうためにはバルバトスを経由しなければならない。そしてその許可を中央国は出している」
中央国はやはり戦争を傍観する立ち位置でいるようだ。
となると、やはり一つ目の壁は西国リブラードになる。
「じゃあ俺たちは先回りしてリブラードに向かうべきだな」

そう言ったのはルーグ先生だった。
「どうするつもりだ？　まさか三人で向かう気ではないだろうな？」
「そのまさかですが。現在アストリアには兵力は残っていないでしょうし、人数が増えたところで連合軍には敵いません。それなら少数精鋭で秘密裏に接触した方が確実です」
「それはそうだが……」
　ルーグ先生の言葉に押し黙る父。
　父親として心配する気持ちはありがたい。けれど別に、俺には不安なんてなかった。兄であるアレクと話をするだけだ。
　それに、俺がこれまで出会ってきた中で最強の先生がついてきてくれる。ホーキスも、俺一人では到底敵わないような強者。
　もし俺たちに兵力を分けるぐらいなら、不安にもなるほど警備が少ないこの王城に使ってほしい。
「まぁルーグが護衛としてついてくれるなら安心か……」
　納得した父は、どこか遠くを見ながら話し始める。
「アレクはニートが行方不明になってからまるで人が変わってしまった。全てを犠牲にしてでも一つの目的を叶えようとしていた」
「一つの目的？」
「ニート。お前の蘇生だ」
「……え？」

　初めて明かされる事実に俺は思わず声を上げてしまった。
「話を聞く限り、お前が言う管理人というのは、影の王のことだろう。奴に特別な力があることは、私も知っていた。まさか神に近しい存在だとは思わなかったが……。お前が責任を感じるからあまり言いたくなかったが、アレクはニートを生き返らせるために影の王に取り入り、最終的に奴を殺めてまでその力を継承した」
　管理人ともなれば、死んだ者の蘇生なども権能で出来るのだろうか。
　いや、出来たとしても魔族の管理人である師匠ならしないだろう。人類にとって悪い未来を止めようとはしても、個人に肩入れはしない。それがこの世の運命であり、あるべき姿だと受け止めるはずだ。
「でも俺は生きてますよね？」
「あぁ、今度はニートを救出しようと動いているのだろう」
　それはルーグ先生やホーキスが考えていたものと同じだった。
　結局はアレクは優しさで動いてくれているのだ。その優しさが少し暴走してしまっているだけ。
　そしてその一因は俺にある。
「私たちでは止められなかったが、もしかしたらニートが会えば考え直してくれるかもしれない。さらに道を踏み外す前に止められるかもしれない。こんな情けない父で申し訳ないが……」
　父は申し訳なさと期待が入り混じった双眸で俺を見つめる。
「アレクを頼んだぞ。ニート」

「任せてください。父上」
俺は父の言葉に力強く頷いたのだった。

◆◆◆◆◆◆

それから俺たちはすぐに西国リブラードに向かうと思っていたのだが、
「まだアストリアの軍がリブラードの国境に着くまでには一週間以上の時間がある。家族でも積もる話があるだろう。落ち着けるうちに休んでおけ」
ルーグ先生がそう言って、リブラードに向かうのは三日後にしたのだ。
けれど俺は知っている。
この三日でルーグ先生やホーキスが五大国の情報をさらに集めて、今後の計画を立てようとしていることを。二人の仕事ぶりは魔大陸でもずっと間近で見てきた。ここらで休むような人たちでないことを理解しているつもりだ。
しかし、俺はお言葉に甘えて少し休むことにした。なんといっても二か月ぶりのアストリアだ。
「こんな街だったんだな……」
俺はアストリアの王都の街を歩きながら、そんな感想を漏らす。
学院に通っていた時も基本は転移魔術で登校していたため、こんな風に街を歩いたことなんてなかった。

そもそも俺は引きこもりで外に出ることすら苦手だったが、今では魔大陸での経験もあるからか、普通に外にも出られるようになっている。
まさか魔大陸で引きこもりのリハビリなんて、誰が想像出来ただろうか。
「……静かすぎる」
普段から街中に出ない俺でも分かる。明らかに王都に活気がない。
その理由は明確で、現在アストリアの兵士たちが連合軍として魔大陸に進軍しているためだ。
「何としてでも止めないとな」
しっかりと覚悟を決めて歩みを進める。
さて、なぜ俺が王城ではなく王都の街中を歩いているのか。
それは大きく分けて二つの理由がある。
一つ目はホーキスに問われた、どんな国や世界を作るかという疑問を解決するため。
自分一人で考えたところでその答えが出るわけではない。だから実際に自分の目で街を見ようと考えた。
俺はこれまで何人もの王に会ってきた。まず実の父親。エドの王であるファルロス師匠。臨時だったが魔国の王であった宰相と、正統な王であるテト。彼らを参考にしつつ、俺は俺なりの自分の道を決めなければならない。
アレクがやってくれるから関係ない、と以前のように人任せではいけないのだ。
そして二つ目の理由は魔術学院に向かっているから。

あまり騒ぎになることはルーグ先生に禁止されているが、クラスメイトに会うぐらいなら大丈夫だと許可は得ている。
ルーグ先生が言うには、クラスメイトたちも俺のことをかなり心配してくれていたらしい。本当に良い友達を持ったなと思う。
俺が生きていると知ったら、みんなはどんな反応をしてくれるだろうか。
そんなことを考えながら歩き始めて三十分ほど経った。
ここで俺はあることに気付く。
（……そういえばアレク兄さん、前に馬車で一時間かかる距離って言ってなかったっけ？）
これまで歩いたことがなかったため知らなかったが、王城から魔術学院までは意外と距離があるらしい。
流石に外に出られるようになったからといって、何時間も歩くのは無理だ。俺は適当に小道に入って誰も見ていないことを確認すると転移魔術を使った。
転移が完了すると、俺は魔術学院の付近の路地裏に着いた。ここも懐かしい。始業式の日に初めて転移した場所だ。そういえばあの時は女性が怪しい男に襲われていたんだっけ。
半年しか経っていないのに数年前のことのように感じる。
俺は路地裏を抜けて魔術学院に向かった。学院に着くと既に学生たちがちらほらと見える。その他に大人も何十人といた。何かイベントでもしているのだろうか。
俺は近くにいた同い年ぐらいの男子生徒に尋ねる。

「今日ってなんでこんなに人が多いんですか？」
「そりゃあ明日は魔術大会があるからね。準備で今日は騒がしいんだよ」
「あっ、なるほど……」
「魔術大会を知らないなんて、もしかして君はあんまり学校に来てなかったりするのかい？」
「あ、まぁそんなところです」
「そうか。ちなみに魔術大会は今日まで募集してるからぜひ参加してみるといいよ。友達を作るための話題作りにはなるんじゃないかな？」
彼は親切に説明してくれると、急いでいたのか軽く頭を下げてこの場を後にする。俺も慌てて彼に頭を下げてお礼を言った。
「そういえば魔術大会なんてあったなぁ」
ここ最近、色々ありすぎて学院の行事なんて忘れていた。
魔術大会とは、学院の生徒で行う年に一回のトーナメント制大会だ。
年に数回行われるクラス対抗戦とは異なり、個人の頂点を決める大会だ。学年ごとに競い合い、一番の生徒が勝ち残る。
クラス対抗戦では魔術の制御や詠唱速度なども点数になるが、魔術大会は単純に実力勝負。
参加自体は自由で、観戦は保護者や王都の住民など生徒以外でも可能なため毎年かなり盛り上がるらしい。
「明日開催か……」

分かっている。俺にはアレクを止める使命があるということを。
けれど俺に休息として与えられた時間は三日もある。ここ二か月は魔術を使っていなかったため、リハビリもしなければならない。それにダンジョンでのボス戦や魔王城での四天王などとの戦いで、どこまで自分が成長出来たか気になっていた。
「参加してみるか」
そんな風に考えながら職員室へ向かったが、あることを思い出して足を止める。
（あれ……俺って死んだことになってるよな？　参加出来るのか？）
Ｅクラスのニートは既に死んだ扱いになっているため、魔術大会に参加出来るのか不安だった。
別に生きていることを打ち明ければいいだけなのだが、打ち明ければ騒ぎになることは間違いない。
クラスメイトだけではなく学院中にすぐに広まるだろう。
（うーん、一旦持ち帰ってルーグ先生に相談してみよ）
俺が一人で悩むよりルーグ先生に相談した方が早いだろう。
ということで俺は来たばかりの学院を後にすることにした。
クラスメイトに会わないのかって？
クラスメイトたちはルーグ先生のスパルタ授業を受けている。そんな彼らが魔術大会に参加しないとは考えにくい。
それなら魔術大会にこっそり参加して、終わった後にばらした方が面白いだろう。

まぁ俺が一回戦で負けないことが大前提だが。
（じゃあ学院は後回しにして、今度はヴィンリスに向かうか）
ヴィンリス。それはアストリアの南西に位置するダンジョン都市。俺が夏休みにクラスメイトたちと実戦合宿を行っていた場所だ。そして俺がルカと出会った地でもある。
（どんな顔して会えばいいんだろう……）
ヴィンリスの冒険者として、俺たちの実戦合宿に協力してくれたルカ。その正体はテラロッサの第二王子であり、スパイだった。
そして俺は彼に裏切られ、刺された挙句、ダンジョンの底に突き落とされた。運良くテトに助けてもらい、魔大陸に逃げ延びたが、普通なら死んでいただろう。
しかしこの問題はいつかは解決しなければならない。
だからこそ俺は、今からヴィンリスにいるルカに会いに行く。
（仲直り出来たらいいんだけど）
そう思ってしまう俺は甘いのだろうか。
けれどどうしても俺はルカを憎めなかった。
「いいや！　とりあえず会ってから話すことは考えよう！」
俺はそう自分に言い聞かせてヴィンリスへと転移魔術を使った。

◆◆◆◆◆◆◆

立ち読みサンプルはここまで